

跋

一

わが國の國際貢獻が地球規模において問われている現在、われわれは常に、この國における歴史的文化的所産について、深切な反省を加えつつ正當な評價を與え、それらを未來の人類にむけ、共通の資産として繼承し提供してゆくことに努めなければならない。

この、史的所産としての文化財、つまり日本文化の一半を支えてきた資産が、いまここに傳えられている。すなわち、多様にして厩大な、漢字・漢文資料から成る、それである。

日本に存する漢字・漢文資料とは、なにか。

1、かつて中國文化―思想・文藝から政經・法制におよぶ―を受容するために將來された漢籍・佛典全般を指す。それは、日本列島に發達した言語・文化とそこに形成された社會・制度に對して、ふかく影響を與えずにおかなかつたその源泉をなす文獻群である。

2、それとともに、その漢字・漢文資料に習熟したわが國知識人の漢字・漢語を用いての、廣汎な内容にわたる著作を指す。古くは金石・木簡などにとどめる漢字語彙から、公私の政事記録や日記類、そして、さまざまな文藝・思想作品や宗教的著述、さらに準漢籍とよばれる漢文による漢籍への注釋類におよぶ文獻類が、無數に蓄積されており、それらは文書・書畫や版刻・金石のかたちをとって、いまに傳わるのである。

なかんづく、この資産―漢字・漢文資料の中核を占める、漢籍・準漢籍は、しかしながら現在なお、すこぶる不安定な状態におかれている。それには、二、三の重要な原因が數えられる。

すなわち近代日本のアカデミズムの成立と日本ナショナリズムの形成との絡み合いの中で、歐米の學術研究方法を移入するに急な

あまり、東洋古來の學問的傳統が輕視されたこと。日本研究の諸分野―國史・國語國文などにおいて、ややもすれば漢字・漢文資料を敬遠する處遇がつづいたこと、などである。

そして、漢學・漢文學の名稱をとる分野の研究自體にも大きく變化がおこり、漸次その源流としての中國文化の研究、つまり中國學へと移行してゆき、ことに戦後は擧げて中國文學・中國思想の研究へと研究體制そのものが變貌を遂げたこと。かくして、漢籍と稱せられる文化財は、そのはざまに在って、ごく少數の篤志家によって辛くも保護されてきたと言っても過言ではないのである。

漢字・漢文資料を扱う研究分野は、しかるに中國學の專家は言うまでもなく、日本史・國語國文・日本思想（倫理學）・佛教（印度哲學・宗教學）・美術史をはじめ、法制・外交・經濟から、近時脚光をあびている醫藥・工藝等の科學技術に、ひろく及んでいる。かかる廣汎な研究分野からの漢字・漢文資料への切實な需要が存するにもかかわらず、その資産を對象とする専門の學術研究機關を關しているために、これら資料自體の取り扱いが、憂慮すべき不安定な状態におかれてきた。

まこと、漢字・漢文資料を對象とする専門研究者についても、戦後わが國の學術・文化を擔當すべき責任ある機關において、無反省のまま、その養成を怠ってきたと言わざるを得ない。

わが國における歴史的文化的所産の現状をかえりみて、この漢字・漢文資料の放置および専門研究者の缺如は、日本文化研究の正常な推進を妨げる重大な要因となっているのである。

他方、國際的視野に立つとき、わが國の漢籍・準漢籍を軸とする漢字・漢文資料の利用は、なお高度の水準を保っている。ひろく歐米地域にもまたがって傳統のある東洋學について、その状況をかえりみると、とりわけ東アジアの現代研究を重視する傾向のなかにあって、かえって中國を中心とした歴史的文化的研究への關心が低下の一途を辿りつつある。當の中國においてすら、簡體字の普及などの事情から、傳統的な古漢語・文言文の文獻資料の利用能力をもつ研究者層が偏在し、同様に、かつて漢文資料による研究水準を誇った朝鮮半島やベトナムにおいて、國語表現にハングルやラテン文字を使用しその擴大にともない、それらの資料を利用する技能は減退し、研究者層を稀薄にしている。

これらの事態は、近代アカデミズムの代表機關である、ここ東京大學において文字どおりその典型を描いてきた。すなわち本學に

保藏される漢籍を中心とする漢字・漢文資料に關して、その基本的情報にかぎっても、その全貌を公共に開示するまでに至らなかった。學術の優先は、不用不急の遺産とみなされた漢籍には、永久に周ってこなかったのである。

二

このたび、「東京大學總合圖書館漢籍目錄」が公刊されるに至ったことは、ほとんど不毛の散沙の地に、忽焉と水脈豊かな綠地の出現をみた感を與えるであろう。

本學が開學百二十年にして、歐米にむかつて學ぶ姿勢を一貫してとりつづけたすえに、もはや追いつくべき對象を失つて、東方文化重視に回歸したとでも言うのであらうか。そうではあるまい。

本學の圖書館行政において、漢籍に對する處置が他の類似の機關と隔たっていたわけではない。『東京大學百年史 部局史四』に掲載された「第二十六編 附屬圖書館」は、この種のものとして貴重の記録である。もともと本學圖書館史のうえでは、「藏書目錄」の編纂は、關東大震災（一九二三・九）以後を論ずるほか已むをえないが、震災後から現在にいたるまで、「和漢書」から「漢籍」にかぎって獨立した收藏書籍目錄を編集した、という記録はない。

むしろ、震災後から敗戦時までの收藏圖書につき、冊子體の藏書目錄を刊行してきたことについて、戦後の状況はいちじるしく變化していたことを『百年史』は告げている。

既刊の「本目錄」は和漢・洋ともそれぞれ二冊、「増加目錄」は和漢書が七冊、洋書が六冊、合計一七冊（所收圖書數約一八萬部）であった。これらの目錄は、現在東京大學が所藏する圖書の一部を収録しているという點に、わずかばかりの利用價值を残す結果になつてしまつた。挫折した理由としては、豫算の問題や刊行計畫自體の問題もあつたろうが、經驗を積んだ、熟達した職員が戦中から戦後にかけてほとんど退職したことが最も大きかつたと思われる。（『百年史 部局史四』1240頁）

と。加えて、戦後の新制大學の發足にともない、教養學部圖書館が參入し、「附屬圖書館」としてはその管理運営上、附屬研究所を

ふくむ全學の各所局に配備する圖書をすべて網羅する機能がもとめられた。その端的な必需工具の一つが、全學總合目録であつた。各部局に所藏される、特色ある書籍目録の公刊とは別に、全學所藏の圖書についての、著者名カード、一三六萬枚の作成は、一九六四年（昭和三十九年）の東京五輪の年^{オリムピック}に完成している。

これは、通常の大學附屬圖書館の一般業務にほかならず、利用者に提供すべき圖書情報の一つである收書目録をなによりも優先させた工作であつた。

この間にあつて、岸本英夫館長による「附屬圖書館改善計畫」の實施〔昭和三十六年十月至三十九年三月〕は、從來の記念館的性格の濃い中央圖書館の建造物を、あげて機能的な近代圖書館へと改造せしめたことにおいて、戦後の東京大學圖書館史の新时期を劃した。そして、その改革の一環として、各種の専門別資料閲覧室が改裝された館内に設けられた。法學部附屬外國法文獻センターや文學部附屬語學ラボラトリ（現、視聽覺教育センター）が開室したのに併行して、アジア資料センターを本館四階輕食堂あとに開いたのが、それである。

アジア資料センターは、文學部の東洋史學・中國哲學・中國文學等の關係教官の協力を得て、館内書庫からアジア諸地域研究のための基礎資料となる圖書約二萬冊を選定して集中排架し、昭和三十八年十一月に開室した。この舉により、總合圖書館の所藏にかかると有數の文獻—漢籍を中軸に、和漢洋のアジア史關係の優良な書籍—の存在が明らかとなった。そして、當センターは文學部の關係研究室のみならず、ひろく全學のアジア地域關係の研究室（言語文學・思想文化・史學・文化人類・地理）にとって、大いなる利用價值を發揮し、昭和六十年三月の縮小解散にいたるまで、關係研究者に親しく活用された。このうち、漢籍は四部分類法を採って配列されたが、そのセンターの排架書籍の目録は、カード化されていて公刊されたものでは、なかった。

これとは別に、漢籍目録について記せば、「東京大學文學部中國哲學中國文學研究室藏書目録」が、その文學部研究報告第一として、昭和四十年三月に刊行されている。本學における公刊された漢籍目録としては、おそらく最も早い時期のものに屬する。東京大

學において漢籍を使用する最たる研究室の蔵書目録として、その索引の便利さからも一舉に利用度を増したのであるが、やがて文學部において、それら研究室内に所蔵する漢籍を一括して別置し、集中排架する書庫を備え、そのかたわらに閲覧室を併設した「漢籍コーナー」が開かれて、専門圖書室の様相を呈した。

すなわち、昭和四十二年秋、久しく合同研究室を構成していた文學部中哲中文研究室が、中國哲學（現、中國思想文化學）と中國文學の兩研究室に分離したのを機に、文學部圖書館構想の「専門別の機能的集中方式」に沿って、當コーナーが設置されたのであるが、「學園紛争」後の昭和四十五年（一九七〇年）から正式に開室した。その翌年、東洋史學研究室より所蔵漢籍の部分が搬入され、いわゆる「三科」の漢籍が同一書庫に排架することができた。現在は、インド哲學佛教學、言語學等の研究室所蔵の漢籍をも集中し、和刻本および朝鮮本をふくむ四部分類の適用可能な漢籍・準漢籍を收藏している。また、同コーナー所蔵書目としては、

「東京大學文學部漢籍コーナー所蔵明版目録」（一九八二年）

「東京大學文學部漢籍コーナー所蔵鈔本目録」（一九八三年）

「東京大學文學部漢籍コーナー所蔵清版目録（一）」（一九八五年） 「同上（二）」（一九八八年）

の三種四冊の小冊子が、出版されていて、いずれも當漢籍コーナーの助手を勤めた山本仁氏の主編にかかる。既蔵漢籍は、ほぼこの三種の書目に盡きるが、この「漢籍コーナー」も、景印類の洋裝本が、増加の一途をたどったことは、他の類似の圖書館とまったく同様である。

他方、東京大學東洋文化研究所は、二十數萬冊にのぼる漢籍を所蔵し、京都大學人文科學研究所のそれと其の蔵書の特徴をきそいあう間柄にあるが、多年企畫されたその分類目録の編成工作が實現をみた。すなわち同研究所に、昭和四十一年、附屬東洋學文獻センターが設置され、それとともに蔵書目録の編纂事業が進められ、ついに四十八年に「東京大學東洋文化研究所漢籍分類目録 本文篇」が、ついで五十年に「同 索引篇」が刊行された。五十六年（一九八一年）には、修正を加えて合冊した縮印版が出て、そのおおよその編刊業務を全うしている。當センターの専任教官であった澤谷昭次・和泉新の兩氏がもっぱらその事に當たった。本「目録」の特色は、同研究所東洋學文獻センター報「センター通信」10（一九七四・一）、12（一九七五・一一）に詳述されている。

そして本「目録」の出刊によって、その先輩格の「京都大學人文科學研究所漢籍分類目録」(一九六三年、六五年)とつねに對照せられ、傳統的中國文獻のユニオンカタログとしての役割を果たすようになった。本邦における所在の漢籍、中國文獻を整理するばあいの、有力な基準となり、その分類と著録の楷範とされているのである。なお、「増訂 日本における漢籍の蒐集―漢籍關係目録集成―」(東洋文庫・東洋學インフォメーションセンター編、汲古書院、一九八二年)を参照のこと。

三

さて、このたびの「東京大學總合圖書館漢籍目録」について、である。

東京大學における研究關係資料としての「漢籍」は、文學部の「漢籍コーナー」收藏のと、東洋文化研究所のと、がその主要な部分を占める。舊制第一高等學校から引繼いで、戦後廢校となった軍關係機關の圖書をあわせた教養學部圖書館には、相當量の漢籍を保有している。醫學部圖書館、法學部、經濟學部、農學部などには、それぞれの専門研究に關する漢籍類が保藏されている。これらは、「全學總合目録」のカードによってその概況を把握することができるが、個個の書籍の書誌的な内容については、精粗一定しない著録の憾みがあった。

そして、總合圖書館の漢籍については、漠然とながらその多種豊富な内容が、學内外からつねに話題にされながらも、全貌をついぞ知悉されないまま現在に至っている。大正の震災後、昭和初期の復興した宏壯な圖書館にむけて、つぎつぎと搬入し收藏された、寄贈・寄託にかかる各種の文庫類には、書誌のうえからもその多様で珍重すべき内容の書籍に満ちていた。ただし、これらの漢籍は、一般書とおなじく東大圖書館固有の整理方式にのっとり、四部分類法を採用してこなかった。

アジア資料センターの開設と「東洋文化研究所漢籍目録」の出現によって、東京大學に保有する漢字・漢文資料が、總合的に文獻情報化の對象となる現實的な條件が備わったと言いうる。その整理の對象となるべき最大の資産が、ほかでもなくこの總合圖書館の「漢籍」であったのである。

昭和五十六年(一九八一年)に至って、長澤規矩也氏はじめ本學内外からの強い要望を背景に、附屬圖書館にむけて文學部(戸川芳

郎教授）東洋文化研究所（尾上兼英教授）より総合圖書館の所藏漢籍にたいする目録編纂の要請を行なった。これを承けて、裏田武夫館長・沙藤隆茂事務部長より、漢籍整理の技能習得をふくむ、目録編輯事業にたいして、文學部の戸川芳郎（中國哲學科教授）・和泉新（助教授、文學部圖書主任）にその指導・助言を依頼した。

昭和五十八年（一九八三年）四月、當面の遂行業務を漢籍目録作製の工作とする古資料目録掛が総合圖書館整理課に新設され、本館三階の圖書館學資料室に隣接して工作室を開いた。杉村英治掛長、小池幸枝・浦野都志子兩司書が配され、その五月、「漢籍目録編輯計畫」が立案され、著録（カード化）の要領を提示し、六月からその要領のもとに「目録」原稿の作製を開始した。かくて、戸川・和泉兩教官の指導體制のもとに、すでに山本仁・高橋良政兩氏による原稿の校閲點檢が行われている。

これに併行して、五十八年十一月より「漢籍研究會」が主として當館職員を対象に開かれ、當初は和泉新（跡見學園女子大學教授）による、五十九年六月からは山本仁・高橋良政兩氏の指導のもとに、整理の實習を兼ねて原稿作製の工作に協力してきた。

ついで、五十九年中に「漢籍資料室」設營の構想にもとづいて、総合圖書館の漢籍全部をその資料室に集中し、四部分類法によって排架し、その漢籍目録を編纂し刊行する基本案が、岡部紀夫整理課長を擔當者として企畫され部分的に、その一部が實現をみた。すなわち、昭和六十年四月、裏田館長・沙藤部長が山崎弘郎館長・田中久文事務部長に交替し、田口貞夫掛長（アジア資料センター）・杉村英治古資料目録掛長が定年退職する機に、裏田・岡部構想が實施され、アジア資料センターを解散することに代わって、その漢籍の四部分類を採った書籍を収めるべく漢籍作業室とのための書庫が、本館三階東側に設けられた。定員削減による苦肉の對應でもあった。

昭和六十年（一九八五年）六月、附屬圖書館においては、漢籍目録の編纂工作が、古資料目録掛の専門業務となるに伴い、新たに「総合圖書館所藏漢籍再整理計畫」が田中幸夫整理課長を中心に策定され、この計畫にもとづいて「所藏漢籍目録編輯委員會」が組織された。當初は、山崎弘郎附屬圖書館長と戸川芳郎を正副委員長に、総合圖書館の古資料目録掛の小池幸枝・浦野都志子を専員として、協力研究者として、和泉新（跡見女子大學）大井剛（文學部）大塚秀高（放送大學）影山輝國（教養學部）小島毅（文學部大學院）笹倉一廣（文學部研究生）高橋良政（早稻田大學大學院）山本仁（文部省初等中等教育局）吉田純（東洋文化研究所）の名を列ねた。そし

て、目録原稿の完成目標を、昭和六十二年十二月におき、冊子體「目録」の本文・索引の原稿カードの編成を完了するものとした。

ここにおいて、「漢籍再整理計畫」はようやく目標のある軌道に乗った。本来、本學附屬圖書館の一大情報管理事業であるべきものが、辛うじて總合圖書館の一掛の作業として認められたのである。それも圖書館學資料室の職務を兼ねた掛員三名が、そのまま專員に屬した。

データシート（著録原稿）の作製とその校閲の作業は、充分でない條件下にあったが、目標にむかつて進行していった。専従する館員杉村英治・小池幸枝・浦野都志子の三氏に、研究者がわから山本仁・高橋良政の兩氏が常時、協同工作した。すでにこの時期に前後して、朝鮮本の校閲には、藤本幸夫氏の全面的な協力を得、平成元年（一九八九年）一月から高山節也氏が、叢書部の校閲に加わった。

整理要領の重點は、著録の方式いかにある。つまり、漢字・漢文資料の根幹としての漢籍について、その対象範圍を定めるとともに、文獻資料である書籍をどのように著録（データシート化）するかにかかっている。その著録、つまり圖書情報は、書名、卷數、編著者、形象（寫本・版本ほか）、刊記などの諸事項を充たすことが需められる。

本事業は、昭和五十八年六月の「目録」原稿の開始にあたって杉村英治掛長立案の「編輯計畫」にある著録要領にもとづき、まったく新規に全書籍を一一に點檢しつつ、データシートを作成していった。したがって、從來の漢籍目録の著録と對照する作業のほか、本學文學部・東洋文化研究所はもとより、内閣文庫・京都大學人文科學研究所・米澤市立圖書館・武田杏雨書屋に訪書して書本の校合をおこない、とおく北京國家圖書館にもその同定を確めていく成果を擧げている。

なお、この「漢籍再整理」にあたって蓄積された著録の方式については、他日、山本仁氏によって、その精細にわたる内容を公表してもらふことになっている。

附屬圖書館は、昭和六十三年、整理課が情報管理課に改編され、近藤禧禔男課長から湯淺富士夫課長に交替したが、古資料目録掛はそのまま存續し、豫想をはるかに超える「再整理」事業が漸次その全貌を明らかにするにつれ、漢籍目録編輯委員會として黒田晴雄

館長と戸川芳郎の間で、完成計畫の大幅な變更を餘儀なくされるに至った。さらに、平成元年（一九八九年）からは古資料目録掛（掛長、不在のまま）を廢して情報管理課和書目録情報掛に編入し、漢籍作業室詰の専従を二名のままとした。高橋柏情報管理課長のもとに、整理狀況の進捗にかんがみ、漢籍データシートの原稿を冊子體目録として印刷刊行する計畫が立ち、平成三年八月、編輯委員會を代表する清水忠雄館長、戸川芳郎に淺野次郎事務部長を加えて、その大綱を承認した。ただし、書目を著録する内容は、館藏漢籍の特色を顯示するためには、なお調整を要し、刊行期日は平成五年以降にずれることが明らかになった。

しかるに、翌四年（一九九二年）四月にいたり、專家の一人浦野都志子司書が情報サービス課に移り、漢籍作業室詰の専従は、小池幸枝司書のみとなった。このようななかで、山本仁氏の渝らぬ應援と、高橋良政、藤本幸夫、高山節也、大塚秀高、大木康ら諸氏の獻身的な力を借りることにより、平成六年（一九九四年）春にはほぼ原稿の完成にこぎつけた。また、本目録の巻頭に掲げた協力者には、主として索引の作成と印刷校正の作業に加わり、多くの時間と努力をこの編刊事業のために費やしてもらった。

本漢籍目録の編成と刊行は、もとより東京大學附屬圖書館の公けの事業であり、その事業を可能にすべく努力を吝まなかった歴代の館長、事務部長、最終段階に衝に當たられた鈴木英夫・大埜浩一兩情報管理課長には、多くの力を假された。

株式會社東京堂出版は、困難を承知でこの目録の出版のため、多大の犠牲を拂われた。すぐれた技術を提供された廣濟堂印刷株式會社とともに、銘記して謝意を表する。印刷出版の全體を總括擔當された松林孝至氏には、ふかく感謝の念を捧げる。

一九九五年乙亥三月

戸川 芳郎